

---

# 古代アメリカ学会会報

第34号

---



ペルー北部高地 エル・パラシオ遺跡 (秦優莉香撮影) ©Proyecto El Palacio

---

## 目次

---

◆第2回東日本部会研究懇談会の報告	1	◆研究会情報	20
◆公開フォーラム・国際シンポジウムの報告	2	◆事務局からのお知らせ	25
◆会員からの寄稿-特集：フィールド調査体験記-	6	◆編集後記	27

---

2013年6月

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

### ■第2回東日本部会研究懇談会 『古代社会へのまなざし』

去る平成25年5月11日、東京大学総合研究博物館にて第2回東日本部会研究懇談会を開催した。昨年度はGIS考古学というテーマを設定し、関連する研究を進めている会員を招いたが、今回は博士課程在籍者の研究成果発表を聴き、その学位論文執筆を支援するという趣旨で企画した。思えばかつて本学会の研究大会では博士課程の学生による発表が多く、私自身も何度も修練の場とさせていただいた。それが繰り上がって若手・中堅層となり、近年の大会に活況をもたらしているのは確かだが、一方で若者が果敢に挑戦する雰囲気は薄れてしまったと感じる。学生会員に対する教育機会の創出という意図のもと、本企画を試行した。

とはいえ今回の発表者は学問的に初々しいレベルではなく、博士論文脱稿に向けて奮闘中の2名であり、聴講側も相応に身構えて場に臨んだ。市川彰会員（日本学術振興会特別研究員PD/国立民族学博物館外来研究員）が中米代表、佐藤吉文会員（南山大学人類学研究所非常勤研究員/国立民族学博物館外来研究員）が南米代表である。イベント名の『古代社会へのまなざし』は両者の発表趣旨に共通するキーワード「社会」および「着目/視点」から採った。発表内容については昨年同様、事前に参加者が予習できるように学会HPに抄録を掲載したので参照されたい。また在住地の制約により普段は接点のない先達に指導を乞う機会ということで、コメンテーターを誰にお願いしたいか尋ねたところ、それぞれから青山和夫会員（茨城大学）、渡部森哉会員（南山大学）との希望が出され、いずれも当人から快諾をいただいた。

開催当日はあいにくの雨天であったが会員19名、非会員6名の参加をみた。井口欣也代表幹事による開会挨拶に続き、市川会員による「メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究」が発表された。青山会員から分析概念や方法などに関する

質疑が提示され、また文献サーヴェイによる墓制研究と自身のフィールドデータを架橋する統合的骨子の構築など具体的課題が浮き彫りとなり、発表者は改善の見通しを得たようであった。休憩を挟んでの佐藤会員の「ティワナクの存在論的理解はいかにして可能か? : ティティカカ湖盆地南西岸のパレルモ遺跡におけるティワナク様式物質文化とその社会的位置づけ」は、存在論的アプローチからパレルモ遺跡のデータに説明を与えた野心的な内容であるが、渡部会員らのコメントで指摘されたようにティワナク研究全体への貢献の明確化が課題となった。

事前に発表者兩名から聞いていた所用時間では足りず（次回の課題である）、またコメンテーターを皮切りに加藤泰建会長や大貫良夫元会長など多くの参加者を交えて議論は白熱し、最終的に4時間以上に及ぶハードな会合となった。長めの持ち時間で存分に発表する機会は、その準備段階で否応なしに論文執筆が進むものである。数々のコメントはもちろん、会への参加自体が両会員の糧となったことであろう。また一参加者として感想を述べるなら、いずれも論文執筆後に継続すべき課題を内包しており、発展性のある萌芽的研究に触れ得たという満足感を覚えた。閉会後の懇親会で幅広い会員層が歓談する中、研究大会に次ぐ活動の目玉として本会が定着しつつあるという手応えを感じた。今後も柔軟な運用を考えていく。

（東日本部会幹事：鶴見英成）



■みんなく公開フォーラム

「古代文明の生成過程—マヤとアンデスの比較—」

松本雄一（山形大学人文学部人間文化学科准教授）

2013年1月27日（日）、キャンパス・イノベーションセンター東京において、みんなく公開フォーラム「古代文明の生成過程—マヤとアンデスの比較—」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）が共催、さらに本学会が協力しての開催であった。関雄二（国立民族学博物館教授）、猪俣健（アリゾナ大学教授）、青山和夫（茨城大学教授）、松本雄一（国立民族学博物館機関研究員）の4人が文明の生成過程という共通のテーマで近年の調査成果を紹介し、その後聴衆からの質問をもとに、マヤとアンデスの比較を通じた総合ディスカッションが行われた（肩書きは当時）。参加者は101名であり、大変盛況であった。

また、その関連イベントとして前日の1月26日（土）にワークショップ「古代文明における経済基盤と祭祀」が実施され、「神殿などの巨大公共建造物の成立過程に生業や奢侈品などの経済的な側面がどのように関わっていたか」というアンデスとマヤの考古学に共通する問題が最新のデータを用いて総合的に検討された。

以下で1月27日のフォーラムでの発表について報告する。

・松本雄一（国立民族学博物館機関研究員）

「遠隔地交流と複雑社会の形成—アンデス中央高地の事例から—」

一般に、アンデス考古学においては、チャビン・デ・ワントル神殿の宗教的・文化的な影響が他地域における文明の形成を促したという見方は依然として根強い。しかし、このような視点は高度な文明を有していた中央の社会が、文明形成の途上にある周縁の社会に支配などの形で影響を与えるという単純な、「中央—周縁」の図式にのっとった解釈を産み出しやすい。

松本がとりあげたカンパヌック・ルミは、紀

元前1000年ごろペルー中央高地に出現し、その建築はチャビン・デ・ワントルと極めて強い類似性を示す。ただし、その一方で物質文化は在地の伝統を維持していた。このようなデータは、在地の集団とチャビン・デ・ワントル神殿との関係が一方的なものではなく、むしろ在地の側がチャビン・デ・ワントルの新たな宗教体系を積極的に取り込み、その結果両者の交流が活性化したことを示唆している。その後紀元前700年以降は、建築のみならず、土器や金属器などの物質文化及び、黒曜石の交易など経済的な側面でも両者の関係が強まっていたことがうかがわれる。

こうしたカンパヌック・ルミの社会変化は、在地の集団が自ら働きかけてチャビン・デ・ワントルとの関係を構築することで神殿が出現し、続いて今度はチャビン・デ・ワントルの側がそのつながりを利用して経済的な面でも影響を与えてゆくという複雑な歴史的過程を示している。

・関雄二（国立民族学博物館教授）

「アンデス文明における権力の発生—最新成果報告」

続いて関がとりあげたペルー北部高地に位置するパコパンパ遺跡は、形成期（紀元前3000年～紀元前後）の大神殿であり、近年の調査によってアンデス文明の形成過程を解明するための重要なデータが得られている。2009年に発見された金製品を伴う『パコパンパ貴婦人の墓』は、紀元前800年ごろにはこの神殿にある種の宗教的なリーダーが存在していたことを示している。

このような神殿社会における権力の萌芽を示す新たなデータが、2012年の調査においても新たに発見された。副葬品を伴う4つの土壙墓が発見され、内2つは金属製品を伴っていたのである。2つの金属製品のうち1つは直径2cmの金環で、もう1つは銀製の針であった。これらを伴った埋葬の被葬者は女性だった可能性が高い。さらに銀製の針を伴った墓からは紡錘車も出土しており、被葬者が織物に関係していた可能性を示している。また副葬品として、幻覚剤として用いられたサボテンの図像が施された土器が見つかったが、このことから被葬者がシャーマンのような性格を有していたことがうかがえる。

これらの墓は、神殿建築の最中に埋め込まれた「貴婦人の墓」とは異なり、実際に神殿を動かし、その聖なる空間を利用していた人物の墓である。興味深いことにこれらの埋葬は建築の変化と深く関わっており、重要な人物の死をきっかけとして神殿建築の増改築が行われた可能性が示唆された。これらの埋葬は「貴婦人の墓」の発見で示された権力の発生という仮説を補強しており、その上で神殿の建築活動と権力との関わりを具体的に示す重要なデータである。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

・青山和夫（茨城大学教授）

「石器研究からみるマヤ文明の盛衰」

マヤ文明（前 1000 年～16 世紀）は、世界の他の古代文明と異なり石器を主要利器とする新石器段階の技術と人力エネルギーの都市文明であった。南北アメリカ大陸において文字、算術、暦、天文学を最も発達させると共に、ゼロの概念を独自に発明したマヤ文明は、人類史上で最も洗練された「究極の石器の都市文明」と位置付けることができる。

マヤ文明の政治経済組織を解明するためには通時的研究が必要不可欠であり、また同時に、一遺跡に焦点を当てた「点の考古学」だけではなく、一つの広範な地域に焦点を当てた「面の考古学」の調査を実施していかなければならない。

コパン遺跡とラ・エントラダ地域の調査(1986～1995年)においては、石器に見られる使用痕の体系的な分析と高精度の産地同定を行い、黒曜石製品の生産活動及び流通を実証的に考察した。その結果黒曜石製品の国家による流通の統御、その劇場パフォーマンスにおける重要性、都市における経済組織の実態などが明らかとなった。

810 年頃の戦争で短時間のうちに放棄されたアグアテカ遺跡の調査においては、支配者層の間で手工業生産が広く行われていたことが明らかとなり、複数の社会的役割を有するマヤの支配者層の権力のあり方が浮き彫りとなった。

セイバル遺跡では、マヤ文明が従来の説より数百年早く、紀元前 1000 年ごろに興ったことが確認された。先古典期中期前半（紀元前 1000—700 年）には複雑な政治経済組織が確立し、高地から搬入された黒曜石の石刃核を用いて石刃が生産されていた。また住民は、地元産のチャートを用いた石器の製作を行っていた。先古典期の政治経済組織に関してはこれまで情報が少なかったため、マヤ文明の起源、都市と王権の盛衰などを研究するための重要なデータであるといえる。

・猪俣健（アリゾナ大学教授）

「セイバル遺跡の発掘成果とマヤ文明の起源」

マヤ文明の起源に関しては、マヤ文明がメキシコ沿岸低地南部で栄えたオルメカ文明の影響によって興ったとする説と、マヤ文明がマヤ低地において独自に興ったという 2 つの説が論点となってきた。しかし、近年のセイバル遺跡の調査によって、マヤ文明成立の背景がこれまで考えられてきたよりも複雑であり、これまでの視点では十分に説明できないことが分かってきた。

セイバル遺跡において、1960 年代のハーバード大学の調査成果を踏まえて 2005 年から新たな調査が開始された。グループ A の建築の層位的な発掘調査によって、最初の公共建築がおおよそ紀元前 1000 年頃に地山を削って建造されたことが明らかとなった。この時期の建築は、後代に他のマヤのセンターで儀礼に用いられた“E グループ複合”と呼ばれる正方形の建築と細長い基壇の組み合わせであり、現在知られている最古のものである。

セイバル遺跡から得られた新たな絶対年代資料に基づいて、ラ・ベンタを始めとする他の調査の絶対年代を再検討した結果、ラ・ベンタが重要なセンターとして出現したのは紀元前 800 年ごろであることが判明した。従って、もはやセイバルにおける建築活動の開始をラ・ベンタからの影響とみなすことは難しい。

セイバルの人々は、紀元前 1000 年頃から公共建築の建造とその後の増改築を開始し、マヤ低地の

他地域、近隣のメキシコ湾岸低地南部、メキシコのチアパス高地やグアテマラ高地などの集団と交流していた。そして、その過程で発達した地域ネットワークがマヤ文明の成立に重要な役割を果たしたと考えられる。

以上の発表の後、会場の聴衆より提示された質問やコメントを交えながら、マヤとアンデスを比較するためにいくつかのトピックを設け総合討論を行った。たとえば、巨大なモニュメントが登場する過程を見ると、マヤでもアンデスでも、小型の共同祭祀場を築き、それを更新していく過程で規模を拡大している点では共通しているが、マヤではこの背景にトウモロコシ農耕の確立を強調している点で、アンデスとはやや異なる見解が示された。また、こうしたモニュメントの巨大化と王を初めとするリーダーの出現過程との間にも一定の相関関係があることがわかった。さらに神殿のようなモニュメントで行われる活動でも、マヤ、アンデス双方ともに儀礼用具を含む多様な工芸品が製作された点では類似しているが、マヤでは異様なまでに石器製作に重きを置いている点が特徴的であることが指摘された。これらの点を含め、最後にアンデスたらしめているもの、マヤたらしめているものとは何であるのかについてさまざまな角度から意見が出され、予定時刻を30分ほどオーバーするほど白熱を帯びた議論が展開された。

## ■国際シンポジウム「中期ホライズンにおける多様性と共通性」参加報告

土井正樹（京都文教大学非常勤講師）

2013年2月16日に、国立民族学博物館第6セミナー室において、国際シンポジウム「中期ホライズンにおける多様性と共通性」が、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表 関雄二 国立民族学博物館教授)の主催および本学会の協力により開催された。ここでは、シンポジウムの概要について報告させていただく。

本シンポジウムでは、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校のウィリアム・イズベル教授、ペルー・カトリック大学のルイス・ハイメ・カスティージョ教授、ペルー国立クスコ・サン・アントニオ・

アバド大学のジュリーノ・サパタ教授、南山大学の渡部森哉准教授、そして私の計5名による報告がなされた。このシンポジウムは、中央アンデス地域の編年で中期ホライズン(紀元後650-1000年)と呼ばれる時期を対象としたものであり、各報告ではとくにワリ社会に焦点が当てられていた。ワリ社会は、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷を本拠とし、現在のペルー山岳部および海岸部に広く影響を与えた、中期ホライズンを代表する社会として知られている。各報告者はそれぞれペルー国内を中心として異なる地域でワリ社会に関連する遺跡を調査しており、ワリ社会に関して地域的にバランスのとれた報告が行われた。

冒頭に、オーガナイザーである国立民族学博物館の関雄二教授より挨拶があった。続いて、もうひとりのオーガナイザーである渡部森哉氏より、このシンポジウムの趣旨として、近年増加しつつあるワリ社会に関する資料について正確に把握することを目的としていることが述べられた。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

最初の報告は、ワリ社会研究において主導的役割を果たしてきたウィリアム・イズベル氏によるものであった。イズベル氏の発表では、主にペルー中央高地南部アヤクーチョ谷のワリ遺跡とコンチョパタ遺跡の資料に関する報告がなされた。注目されたのは、ペルー南海岸のナスカ社会との関連性を有する土器と、ティティカカ湖畔を拠点とするティワナク社会との関連性を有する土器に関する見解であった。両者が同時代に併存していたと考えられることから、イズベル氏は、ワリ社会の内部にナスカの宗教を信奉する集団とティワナクの宗教を信奉する集団とが存在していた可能性

があることを指摘した。多様な集団をその内部に包括していたと考えられるワリ社会に対して、ナスカ系宗教集団対ティワナク系宗教集団という図式は単純過ぎるような思われ、土器様式と集団との対応関係を知るには、それらの出土区域や出土状況も様式によって区別できるのかなど、より綿密な分析も必要であると考え。しかし、ワリ社会を異質な集団の集合ととらえ、ワリ社会内部の集団の多様性に具体的に迫ろうとする本報告は、今後のワリ社会研究のひとつの方向性を示している。

昼食休憩をはさみ、次の報告を私が行った。アヤクーチョ谷は、首都が存在するワリ社会の中心地域であるが、1980年代のテロ活動によりこの地域での考古学調査は停滞したため、ほかの地域に比べワリ社会に関する調査数も限られている。とくにこの地域では、小規模な遺跡を対象とした調査と中期ホライズンに先行する時期からの通時的変化を解明するための調査が乏しいことを述べ、アヤクーチョ谷の小規模な集落の発掘資料に基づいた、ワリ社会とその前の時期のワルパ社会との連続性と断続性に関する報告を行った。

まず編年に関して、土器様式とその出土状況の分析から、前期中間期後期と中期ホライズン前半（中期ホライズン 1）とを明確に区別することが難しいことを指摘した。次に、農作物などの生産用具の分析および祭祀施設の分析の結果、前期中間期から中期ホライズンにかけて農耕生産の強化が生じ、重要な祭祀の場が消失した可能性があることを報告した。一般に考えられているようにワリ社会＝国家と想定するならば、このような小集落における変化は、国家による支配を反映している可能性がある。

しかし、近年の権力論やエイジェンシーをめぐる議論を考慮するならば、国家による支配だけでなく、小集落の住民の自律性にも目を向ける必要がある。そこで最後に、ワマンガ様式と呼ばれる土器の装飾の分析に基づき、小集落住民の自律性に関する報告を行った。分析の結果、前期中間期から中期ホライズンにかけての集落単位での自律性を示す証拠を見いだすことはできなかったものの、特定の装飾要素の出現頻度には地域性が認められ、その地域性がワリ社会内部における地域毎のまとまりを反映している可能性があることを指摘した。前述したように、アヤクーチョ谷でのワ

リ社会研究において小集落に注目した研究や通時的研究は稀であり、今後、このような調査・研究が増加することが期待される。

続いて、クスコ地方で調査を続けるジュリーノ・サパタ氏により近年の調査による新発見に関する報告があった。クスコ地方には、ワリ社会を代表する地方行政センターであると考えられているピキリヤクタ遺跡が存在するものの、この遺跡を除き、長い間ワリ社会に関する資料は報告されていなかった。しかし近年、広大なワロ遺跡をはじめとし、ワリ社会に関連する多くの資料が発見されている。

サパタ氏による多数の写真を用いた調査報告は、私にはどれも新鮮な内容であった。なかでも以下の3点が印象的であった。まず1つ目は墓の副葬品である。氏が「エリート」の墓として紹介した墓からは、ワリ社会の中心地であるアヤクーチョ谷からは出土していない、金製品をはじめとする豪華な副葬品がみついている。アヤクーチョ谷では、ワリ社会の「エリート」の墓と考えられる手の込んだつくりの墓は、全てが盗掘もしくは攪乱された状態でみついている。したがって、クスコの事例は、ワリ社会の「エリート」の墓の様子を知るための貴重な手がかりとなる。2つ目は、クスコ地方でワマンガ様式土器がみついていることである。以前より、アヤクーチョ谷のワマンガ様式に類似する土器がクスコ地方に存在することは知られていたが、今回の報告では、予想以上にそれらが豊富に存在することを知ることができた。かつて、ワマンガ様式はアヤクーチョ谷内だけに存在すると考えられていたが、クスコ地方にも豊富に存在することは、アヤクーチョ谷とクスコ地方との間に強いつながりが存在したことを示唆している。3つ目は、アヤクーチョ谷のワリ社会の物質文化を模倣したものがクスコ地域に存在することである。ワリ社会の土器の模倣品や、ワリ社会に特徴的な帽子を表現した地元様式の土器などが存在することから、この地方の人々がワリ社会の装飾要素や物質文化を取り入れていたことが分かる。

渡部森哉氏からは、ペルー北高地のエル・パラシオ遺跡の発掘成果を中心とする報告がなされた。エル・パラシオ遺跡は、以前より、ワリ社会に特徴的な矩形建築が存在することで知られていたが、

そこでの本格的な調査は行われてこなかった。渡部氏の調査により、この遺跡がかなりの規模を有していることが判明しているが、その全体像をつかむには、調査の継続が必要である。

写真を用いた報告により、部分的ながらも、直線的な壁によって構成される構造物や石造水路が複雑に重なり合っている様子を知ることができた。遺物としては、ほとんどは地元北高地のカハマルカ様式の土器が中心であり、ごくわずかにワリ社会と関係する土器や骨角器が出土していた。興味深いことにカハマルカ様式とワリ社会的要素との融合や、ワリ社会の土器の模倣を示す土器がほとんど出土しておらず、地元の人々がワリ社会の物質文化要素を積極的に取り入れようとしていた痕跡は認められない。今後は、未解明な点の多いカハマルカの社会に関する調査・研究を進め、ワリ社会の物質文化要素が、どのような歴史的、社会的脈絡の中で現れてきているのかを明確にし、カハマルカ社会とワリ社会との関係を明らかにする必要がある。

このように、考古資料の解釈において歴史的、社会的な脈絡を考慮することの重要性を端的に示していたのが、本シンポジウムで最後となったルイス・ハイメ・カスティージョ氏による報告である。カスティージョ氏は、北海岸、ヘケテペケ河谷に存在するサン・ホセ・デ・モーロ遺跡の調査成果について報告した。サン・ホセ・デ・モーロ遺跡は、中期ホライズン以前より北海岸に栄えたモチェ社会に属する遺跡である。

サン・ホセ・デ・モーロ遺跡から出土しているワリ的な遺物は、墓の副葬品として出土しているものであり、墓の中でも最も豪華な墓にのみ存在することが報告された。カスティージョ氏によれば、このような現象は、モチェ社会の「エリート」

が、自らの地位の差別化をはかり、社会秩序を維持するためにワリ社会の物質文化を必要としたことを示しているという。さらに、ワリ社会からの輸入品だけではこのような「エリート」たちの需要を満たせなかったために、ワリ社会の土器を模倣した土器が地元で製作されたという。実際に、サン・ホセ・デ・モーロからは、ワリ社会とモチェ社会の土器様式の特徴が1つの土器上に共存する例もみついている。カスティージョ氏が主張するように、このような証拠は、かつて有力であったワリ社会がモチェ社会を支配していたというモデルを支持するものではなく、むしろモチェ社会の「エリート」が、ワリの物質文化要素を主体的に取り入れていたことを示している。

こうした5人の発表の後、イサベル・ドゥルック(ウィスコンシン大学名誉研究員)、松本雄一(国立民族学博物館機関研究員)、佐藤吉文(国立民族学博物館外来研究員)、関の諸氏よりコメントと質問が投げかけられ、それを中心に活発な議論が展開した。

本報告を締めくくるにあたり、シンポジウムへの参加を通じて感じた、ワリ社会研究の課題について述べたい。これまでのワリ社会研究では、ワリ社会と関連する遺物や遺構が現在のペルー各地に存在することに注目が集まっていたが、今後は、そのような遺物や遺構が、各地域の歴史的脈絡の中でどのように現れてくるのかを厳密に検討する必要がある。このような調査・研究を通じて、ある地域ではワリ社会の物質文化の模倣や地元の物質文化との融合が生じているのに対し、ほかの地域ではそのようなことが生じていないという現象の理由やワリ社会の政治構造をより適切に説明することができるようになるであろう。

---

---

## 会員からの寄稿

---

---

### —特集：フィールド調査体験記—

近年、学生会員たちの多くが活発にフィールド調査へ参加したり、自ら調査を立ち上げたりしています。今号では、古代アメリカに関する研究を始めたばかりの学生会員を中心に投稿を募り、特集を組みました。寄稿者は、初めて現地調査を経験し、これから研究の方向性を定めていこうとしている学生から、大きな研究目標に向かって第一歩を踏み出し始めた大学院生や青年海外協力隊隊員まで、バラエティに富む12名の会員です(掲載は氏名50音順)。現地調査での体験談を交えながら、自らの問題意識や調査の目的、研究の展望に関して綴られた本特集を通し、次代を担う研究者の卵たちの関心事を広く知っていただく機会になればと思います。

## ●アンデス地帯形成期におけるワヤガ川上流域の社会変化—社会複雑化の視点から—

井上恭平（埼玉大学文化科学研究科修士課程2年）

筆者は、学部と修士を通して、アンデス東斜面とアマゾン熱帯低地を踏査する機会にめぐまれた。互いにまったく異なる生態環境の両地域を訪れる中で、アンデス東斜面の社会展開を明らかにするには、従来文明が展開しなかったと考えられてきたアマゾン熱帯低地との関係性を含めて見直す必要があるのではないかと考えるに至った。修士論文では、アンデス東斜面に位置するワヤガ川上流域を中心として、この問題に取り組みたいと考えている。

ワヤガ川上流域は、日本のアンデス調査団が初めて大規模な発掘調査を行ったことで著名な地域であり、後の研究におけるその学術的意義は計り知れない。1960年代の一連の調査の中で、形成期早期の無土器神殿建築が存在することが明らかにされ、その社会展開は「神殿更新モデル」として概念化された（加藤・関 1998）。しかしワヤガ川流域は、形成期早期に神殿を中心とした社会が展開した後、形成期前期、中期には神殿が放棄される。また、この神殿放棄の時期に、東に隣接する神殿を持たないウカヤリ熱帯低地との緊密な関係が存在していたことが指摘されている。（Lathrap 1970, 松本 2010）。神殿が存在しなかった期間、この地域はどのような社会プロセスを経たのか、またワヤガ川上流域と熱帯低地の関係性は社会プロセスにどのような影響をもたらしていたのかについては議論が十分に尽くされておらず、2001年、2002年に行われた井口らの発掘調査を除いて、この地域の調査、研究には大きな進展は見られない。一方、他地域での調査、研究の蓄積は著しく、着々と形成期の社会に対する新たな視点が打ち出されている。ただしこれらの研究では、神殿を核とした社会が展開していたという見解は共有しており、その点でワヤガ川上流域の社会展開はやや異なっているといえる。

現在の研究の傾向としては、対象地域や社会に固有な社会プロセスを解明する立場が強い。しかしながら筆者は、それぞれの社会プロセスが固有のものであっても、地域や時代を超えて社会プロセスを比較することが、それぞれの類似や差異を理解するために必要な作業であると考えている。そのために、

社会をシステムとして捉え、その構成要素の相互作用とシステム全体の複雑性に着目することで、異なる社会プロセスの相互比較が可能になると筆者は考えている。こうした枠組みから、熱帯低地との関係性を含めてワヤガ川上流域の社会展開を考察し、他地域との比較を通してアンデス形成期の広い文脈に位置づけ、神殿の有無が社会の複雑化にどのような影響を与えるのかを論じていきたい。

最後に、今後の研究の展望を述べたい。修士論文では、アンデス東斜面を中心としてその社会プロセスとアマゾン熱帯低地との関係性について取り組むが、比較上困難な点として、アンデス熱帯低地の厳密な編年枠組みが存在しないことが挙げられる。これは、熱帯雨林という環境上の制約により遺跡の特定が難しいことや、アマゾン川の氾濫で遺跡が削られてしまっていることに起因していると思われるが、根気強い踏査と適用可能な分析方法を模索することで、可能な限り改善させていきたいと考えている。今後もアマゾンとアンデスの双方から見た関係性とその社会プロセスの解明について取り組んでいきたい。

### 参考文献

加藤泰建・関雄二 編、1998、『文明の創造カー古代アンデスの神殿と社会』、角川書店、東京

Lathrap, D. W., 1970, *The Upper Amazon*. Thames and Hudson, London.

松本雄一、2010、「ペルー、ワヤガ川上流域における形成期の再検討」、『古代アメリカ』第13号、古代アメリカ学会、pp.1-30.

## ●コスタリカ共和国、グァヤボ国立遺跡公園発掘調査参加記

植村まどか（京都外国語大学大学院外国語学研究科 博士前期課程1年）

### はじめに

グァヤボ国立遺跡公園は、コスタリカ共和国カルタゴ州トゥリアルバ市にあり、コスタリカ共和国の背骨のようなコスタリカ中央火山脈の東端にそびえるトゥリアルバ火山（Volcán Turrialba 標高3,328m）の南東部に位置している。このグァヤボ国立遺跡公園は、1973年に国立公園として創設され、現在国内



で一般公開されている唯一の考古遺跡である（写真1）。



（写真1 展望台から見下ろすグァヤボ遺跡） ©植村まどか

今回筆者は、2013年1月から約2ヵ月間、コスタリカ大学が主体となって行っているグァヤボ遺跡国立公園の発掘調査に「外国人ボランティア」として参加した。昨年8月、京都外国語大学の南博史教授に引率されコスタリカ大学を訪問した際に、たまたま今回の考古学調査の話題が挙がり、現在中米の考古学を学んでいるということで招待されることになった。

### コスタリカ大学によるグァヤボ遺跡の調査

この考古学調査は、コスタリカ大学教員のヘラルド・アラルコン氏（Alarcón, Gerardo）を中心とする学術調査である。また、大学の長期休暇を利用したコスタリカ大学考古学科の学生のための実習の場としても利用され、一時は打ち切られたこともあったが、1978年以来30年にわたり調査されている。発掘実習は5週間、その後2週間は学内の研究室で収集した遺物の分析を行い、発掘を行ったグループごとに報告書を作成して大学に提出する。

グァヤボ遺跡は、7世紀から12世紀頃に栄えた遺跡で、特に900年から1100年の間に集中的に建造物が建築されたようである。遺跡内では、石造りの円形の建造物土台や山腹からの湧き水を引いた人工水路、遺跡内に張り巡らされた石畳の道などが確認されている（写真2）。トゥリアルバ火山のふもとにあ

たるトゥリアルバ谷に建設されていることから、カリブ海側と中央盆地を結ぶ中継地、もしくは検問所の機能を果たしていたのではないかと推測されている。グァヤボ遺跡の他にも、トゥリアルバ火山の北東部にはラス・メルセデス遺跡、北部にはヌエボ・コリント遺跡がそれぞれ確認されている。



（写真2 石造りの円形建造物土台と石畳の道） ©植村まどか

### 調査参加記

さて、筆者はこれまでに国内外での発掘調査の参加経験はあるものの、日本人が主体となって行う調査ばかりで、筆者自身が外国人として調査に参加するのはこれが初めてのことである。発掘実習中は、遺跡公園内の宿舎に宿泊すると聞き、コスタリカ人学生たちとの共同生活は不安でいっぱいだったが、いざ現場が始まると心配事や不安はすべて杞憂に終わった。学部生時代にペルー留学で身につけたスペイン語も幸いし、「考古学を学ぶ年代の若者」という括りに国籍は関係なく、共同生活の面ではすぐに打ち解けることができた。

しかし、現場に出ると困惑することも多かった。日本人調査団のもとでの調査は、時間厳守、無駄は省く、きびきび働く、と教わってきたが、今回の現場ではこのようなことは求められていなかったように思う。例えば、毎朝7時に宿舎を出発し、徒歩で各自の現場へ向かうのだが、私が所属していた7人グループの中で時間通りに準備できていたのは筆者ともう一人の男子学生だけだったし、現場へ出て発掘を始めてしばらくすると、「お腹が減った」と言って持参したお菓子や果物などを食べ始める。コスタリカをはじめ中米諸国では、メリエンダ（merienda）という間食の文化があるようで、たちまち休憩タイ

ムに入ってしまうのである（写真3）。



（写真3 メリエンダをとる実習生たち） ©植村まどか

筆者は、日本人の威信にかけて時間こそ守り、きびきび働いたが、このメリエンダの誘惑には最終的には負けてしまい、お菓子だけは持参するようになった。郷に入っては郷に従え、である。

またコスタリカの学生たちも、少なからず日本人から学ぶものがあったようだ。筆者が毎朝少し早く起きて現場に持っていく道具のチェックをしていることを知って一緒に早起きをしてチェックしてくれるようになったし、少しでも時間を守ろうと努力していたことはとても嬉しく思った。現場での最後の週に、グループみんなで早起きをして、ラジオ体操を教えたことはいい思い出である。

この現場では、外国人として調査に参加することによって、新たな視点から物事を経験し、学ぶことができたし、コスタリカ大学の学生たちと良い交友関係が持てたことが何よりの収穫だった。

### おわりに

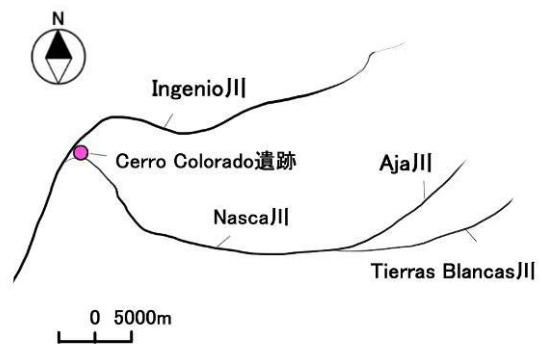
コスタリカ大学での調査終了後、修士論文の研究テーマである祭祀メタテに関する資料収集のため約2週間の滞在を続け、首都サンホセ市内にあるコスタリカ中央銀行博物館、ヒスイ博物館に収蔵されるメタテの肉眼観察と写真撮影を行った。

今後はコスタリカ国立博物館の協力も得て、祭祀メタテに関する情報収集および遺物調査を進める予定である。

### ●私のナスカ調査

加藤亜梨沙（山形大学大学院社会文化システム研究科 修士課程2年）

山形大学ナスカ研究プロジェクトに参加して、ペルー南海岸のナスカ谷で一般調査（2012年8月～10月）を行った。調査の目的はナスカ谷におけるセトルメント・パターンを検討することによって、パラカス期からインカ期までの約2000年間にわたる、社会の動態を明らかにすることにある。



（図1 ナスカ谷周辺）©山形大学人文学部附属ナスカ研究所



（図2 Cerro Colorado 遺跡）©山形大学人文学部附属ナスカ研究所

調査範囲はナスカ谷全域である。具体的には Aja 川および Tierras Blancas 川の流域から、Nasca 川と Ingenio 川の合流地点までである。ナスカ谷の一般調査は米国やペルーの研究者によってすでに実施されているが、その下流部に関して調査が不足している。また人工衛星から撮影された画像（最小分解能 62cm）を詳細に分析することによって、これまで見過ごされてきた遺跡を発見することに努めた。その結果、新たに 53 カ所の考古遺跡を発見することができた。なお、この他に 184 ヶ所の遺跡がナスカ谷ですでに報告されている。

現地調査に先立ち、人工衛星画像を分析して、考古遺跡と考えられる場所をまず同定した。これらの場所を実際に踏査してみると、必ずしも考古遺跡ではなく、近年の建物の遺構であることが少なくない。考古遺跡だと判断すると、地表の土器を採取するとともに、遺構に関する記録をとった。

現地調査は早朝5時に起床して、午前中（月曜～金曜）に実施した。調査には国立イカ大学出身の考古学者、日本語の堪能なペルー人学生、運転手に同行してもらった。前日に準備した目的地までの地図を見せながら、運転手に道順を説明し、目的地に向かった。遠い場所だと、車で1時間以上もかかる。車が通れる場所まで行き、そこからは徒歩で移動する。GPSのナビゲーションを頼りに、下流部では砂山を歩きまわり、上流部では岩山を登りながら、考古遺跡を探した。遺跡を見つけると、同行した現地考古学者と相談しながら、記録をとった。

調査を終えて、ナスカの町に戻るのは午後1時もしくは2時頃である。昼食と休憩をはさみ、午後の作業は4時頃から始まる。午後は調査した遺跡のデータおよび遺物の整理や翌日の調査の準備を行った。まず作業日記をつくり、現地で撮影した写真を整理した。写真や記録を見返して気になったことは、その都度同行した現地の考古学者と相談した。夕食の後は、人工衛星画像を使って、翌日の調査予定地を確認した。翌日訪れる予定の候補地付近の人工衛星画像を印刷し、現地に持参するための資料を作成した。

3ヶ月にわたる現地調査で得られたデータを現在整理・検討している。これらのデータを分析することで、ナスカ谷におけるセトルメント・パターンとその変化に関する修士論文を執筆する予定である。



(図3 Cerro Colorado 遺跡出土の Ica 期の土器)

©山形大学人文学部附属ナスカ研究所

## ●2012年夏、メキシコ発掘体験記

佐藤勇生（京都大学大学院理学研究科修士課程2年）

現在、私は自然人類学を学んでいるが、出身は外国語学部であり、発掘現場をこれまで見たこともなかった。古人骨資料を対象とした研究をする上で、一次資料を土中から掘り起こす考古学の発掘調査を経験することが、古人骨資料のより深い理解にもつながると考え、2012年の夏に2カ月間、メキシコのテオティワカン遺跡で発掘調査に参加させていただいた。

古人骨を扱う際には人骨そのものが持つ情報と同様に、それがどのような遺構から出土し、その遺構が他の遺構とどのような関係にあるのかなどの考古学的情報も重要である。しかし、実際の発掘現場や作業の経験がなければ、考古学的情報を具体的にイメージし、読み解くことは難しい。そこで、考古学的情報を読み解くことに苦手意識を感じていた私は、発掘がどのように行われ、骨資料をはじめとする遺物がどのように出土しているのかという事を、実際の発掘作業を通して経験することが必要であると考えた。

また、C.S.ラーセンが著書「Bioarchaeology」の中で訴えている、自然人類学者と考古学者間の密接な関係作りの必要性を感じたことも、発掘調査への参加理由の1つである。古人骨から得られる情報は分析技術の高まりによって増しているが、その情報を十分に活用するには考古学者との連携を強めることが重要であるとラーセンは指摘している。

以上の理由から発掘調査に参加する必要性を強く感じ、学部時代の恩師でありメキシコで長年調査されている愛知県立大学の杉山三郎特任教授に相談したところ、テオティワカンの「太陽のピラミッド」を調査しているA.サラビア氏の調査団を紹介していただくことができた。

調査団の主な対象は「太陽のピラミッド」頂上付近の発掘調査であり、私は頂上部から一段下がった部分の発掘に加わった。発掘作業を通して、考古学の基本である掘り方、図面の書き方、土や石の種類と見分け方、出土した遺物の記録方法など様々なことを学ばせて頂いた。力仕事も多い一方で、非常に繊細な作業もあり、作業員全員が質の異なる作業を次から次へとテキパキとこなす姿に、発掘作業にお

けるチームワークの重要性を感じた。

力仕事から来る筋肉痛にも慣れた頃になると、掘る、図面を書く、遺物を分けて袋詰めする、といった一連の作業はスムーズに行えるようになったが、図面を綺麗に描くことは最後までできず「お前の図面は幼稚園児のお絵かきみたいだな」と笑われる始末だった。



◎佐藤勇生

地面を掘り、図面を描き、遺物を記録する発掘作業を実際に経験できた意味は、私にとって非常に大きい。文字で書かれた考古学的情報は、以前よりもイメージしやすく具体性を持ち、考古学的コンテストのより深い理解へつながるようになった。また、メキシコは人骨の保存状態が良く出土頻度が高いこともあり、自然人類学者と考古学者の関係は非常に密接で、互いの研究に強い関心を持ちながら研究が進められていることがわかった。

発掘現場の雰囲気は笑いに満ちており、発掘作業をしていた2ヶ月間は楽しく、多くのことを学ぶことができた。考古学的なコンテキストをより深く理解し、考古学者と密接に連携していくために、今後も発掘に携わる機会を作り、考古学的な知識と経験を増やしていきたい。

最後に、発掘団団長のA.サラビア氏、作業を通じ多くの事を教えてくださったN.ヌニェス氏、最初から最後までお世話いただいた杉山三郎先生、その他多くの方々の助けがあり、今回このような機会を得ることができたことを、この場を借りてお礼申し上げたい。

## ●石期～形成期の中央アンデス地帯における生業研究への試み

荘司一步(埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程2年)

筆者は修士論文を現在執筆中である一方、井口欣也教授を中心に再開されたペルー共和国カハマルカ県クントゥル・ワシ遺跡の発掘調査に、2012年8月から2か月にわたり参加する機会を得た。このような研究環境の中で筆者の抱いている問題意識についてごく簡単に紹介する。

### 生業研究への試み

筆者は「生業」をキーワードとして、中央アンデス地帯における石期～形成期(9000 B.C.～A.D. 1頃)を一つの流れの中に位置づけることを目指している。そして、そのような生業の戦略や技術を基礎とした社会組織の動態が、これまでの蓄積されてきた形成期研究の中でどのように位置づけられるのかを検討する。

人類学、考古学において「生業」というテーマは決して目新しいものでなく、むしろ馴染み深いものとしてこれまでも多くの研究が蓄積されてきた。中央アンデスにおけるそうした研究も1960～80年代に多く行われている。それにもかかわらず、筆者が今「生業」に着目する理由は、中央アンデス形成期の調査動向や先行研究と深く関わっている。

### 先行研究からみた問題意識と生業研究の意義

アンデス文明の形成期研究では、祭祀建造物や超自然的な図像が古くから研究者の注目を集めてきたため、「祭祀」に関心が高かったことは否めない。そうした研究動向の中で、日本のアンデス調査団が行ってきた形成期研究も、祭祀建造物の調査成果を中心に展開されてきた。そのうち、日本の調査団の重要な一つの成果として「神殿更新モデル」の提示が挙げられる。日本の調査団は、コトシュ遺跡やその他の祭祀建造物遺跡の調査成果から、儀礼的な増改築を繰り返しながら祭祀建造物を拡張していくという「神殿更新」が社会と相互に刺激し合いながら発展していくというモデルを提示した。ここでは、生産力の増加による余剰の増大が階層を生み、公共建造物を生むというような、旧大陸を中心とした「経済重視の発展モデル」へのアンチテーゼ的性格が強

く押し出されてきたと言える。しかし、「神殿更新」に際して、実際にどのような技術革新が起こったのか検討されることは少なく、祭祀建造物を支えた生業も詳しくわかっているわけではない。このことから、神殿を中心とした社会展開の中で生業をより詳細に明らかにすることは、これらの研究を相対的に捉えるためにも、経済重視か神殿重視かという二者択一的な構図を乗り越えて統合的に社会展開を捉えるためにも、基礎的な作業として必要である。

一方で、食糧の生産と消費というような基本的な経済活動に関する研究は、発掘技術の進展とその蓄積、理化学分析の導入によって急速に進展しつつある。このような新しいデータを統合することで、生業研究は飛躍的に進展する可能性を持っている。こうした研究動向も筆者を生業研究へと向かわせる動機となっている。



(調査風景) ©クントゥル・ワシ考古学プロジェクト

### 生業の戦略や技術に関わる組織編制

分業や協業などの組織編制を含んだ生業に関する戦略や技術は、集団を構成する社会組織と深く係わっている。このような視点から考えれば、生業研究において重視されるべきなのは、その生産性や何を主食としていたかということよりも、どのように食糧を獲得していたかという点であろう。このように生業と社会にアプローチすることで、石期、古期、形成期を分断して研究するのではなく、一つの流れの中に位置づけ、より相対的、統合的に社会動態を捉えることが可能になる。

以上、筆者が現在持っている関心と問題意識について、到底言い尽くせないながらも述べてきた。こうした関心のもとで参加した発掘調査では、澱粉粒分析のサンプリングなどの調査技術を学ぶ機会に恵

まれた。今後もこのような問題意識をもちながら、特に形成期における生活址の調査など、当時の社会に総合的視点から迫れるような「遺跡の完全性」を意識した調査・研究を志したいと考えている。

### ●黒曜石と共存する生活とは-原産地調査を行って-

千葉裕太 (愛知県立大学大学院国際文化研究科  
博士前期課程2年)

幼い頃学校の先生が見せてくれたその石は深い黒色を呈しながらも強い輝きを放ち、近づけば驚くほどに透明で、しかし触れると恐ろしいほどに鋭利なもので、私は一瞬にしてその石に魅せられてしまった。この石を使っていた人々はどんな暮らしをしていたのか、もし私達が今でも石を使っていたらどんな暮らしをしていたのだろうか、それが私の研究の原点だった。比較的最近まで石器を主要利器としていたメソアメリカ人の存在を知った時、この疑問への答えが得られるのではと、私は研究を始めたのである。

学部時代には先スペイン期メキシコ中央高原での黒曜石の採掘について研究した。都市センター内の黒曜石製品の工房の存在はよく知られているし、加工法については様々研究がなされている。しかしそもそもどうやって石材を手にいれていたのか調べてみると、意外と先行研究が出てこないのである。これはもう実際に原産地に行ってみるしかあるまいと、たまたまその地方出身の友人がいたため案内を頼んだ。イダルゴ州パチューカにあるその原産地では、かつてメソアメリカ人たちが地中深くから掘り起こした黒曜石が辺り一面に広がっている。踏みしめるたび石同士が互いにぶつかり、澄んだ高音を耳に届けてくれる。井戸のように掘り下げられた採掘跡の立坑を覗き込み、いつかは中に入りたい、坑道も測量をしてみたいなどと思ったものである。

それ以来メキシコに行くたび各地の原産地を訪れるようになった。採掘方式や坑口の直径、黒曜石の色、現地加工品の型式(石刃核など)をチェックしては、ノートに書き留めて、写真を撮り、サンプルを採取している。おかげで帰国する頃には荷物の中に黒曜石が大量になり、空港を通る際には止められないかといつもハラハラする。原産地調査の際には、できるだけ地元民をガイドに雇う。理由はいくつか

ある。例えば土地の所有者と遭遇した場合やサンプル採取の許可を得る場合に、交渉役を頼める。また地元民は露頭への行き方を知っている場合があり、山道で迷う時間を短縮できることもある。そして何より山道を歩く場合、足を滑らす、ヘビに噛まれるなどの危険を伴うため互助バディとなってもらったためである。実際に崖から落ちそうになってガイドに助けってもらったこともあった。まあ一面に広がる黒曜石に夢中になって足元ばかりに目を取られ、うっかりウチワサボテンに激突した時には、頭に刺さったトゲを抜く私を指さし腹を抱えて大笑いしてくれたが…。

原産地を訪れると、現在でも土地の人々は黒曜石をととも身近なものとして捉えているようだ。例えばスペイン語で「オブシディアナ」といっても通じないが「イツトリ」という先住民言語を用いると通じる場合がある。ナワ語系でない地域でも、その土地その土地で呼び名があるようだ。一部の原産地ではすぐそばに黒曜石製のお土産を作っている工房もある。私たちがメキシコ各地の遺跡や民芸品市場で見かける土産物には、このように原産地付近の工房で作られ各地に卸されているものもあるようだ。ほかにも家の壁の装飾に使っていたり、泥棒対策に塀の上に散りばめていたり、黒曜石はなんとも身近にあるもののように興味深い。

現在私は黒曜石の利器以外の使用について、研究している。利器として黒曜石製品を見たとき、製品の再利用や再加工など、非常に現実的な生産性や生産効率の側面が垣間見えることがある。一方で、いくつかの絵文書や征服者たちの記述には、黒曜石を薬や医療器具として使用していた例、お守りや呪術具として使用していた例が書かれている。またいわゆるエキセントリック石器というものは、明らかに利器としての使用は想定されていない。ここには、利器としての物理的性質や現実性とは別の次元にある、メソアメリカ人の民間知や世界観が込められているように思われる。そしてこのような黒曜石の扱い方の多様性は、彼らにとって黒曜石があまりにも身近な物質であったからこそ生じたのではないかと思うのだ。まるで私たち日本人が日ごろ口にしながらも、何かの時には清めのためや治療のために用いる身近な物質、塩のようである。そしてこのような捉え方で黒曜石と人々との関わり方を研究してみる

ことは、つまりは私の研究の原点である「もし私達が石での生活を続けていたらどんな暮らしをしていたのだろうか」という疑問を解決する足がかりになってくれそうな気がするのだ。



(庭に露頭のある風景) ©千葉裕太



(崖と露頭とサボテンと) ©千葉裕太

## ●アンデス植民地期を研究するにあたって

西田謙治 (埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程2年)

ペルー共和国の社会に興味を持ったのは2008年、筆者が学部生1年の頃、何気なしにその土地へ赴いた時である。地球の裏側でみた光景は、新鮮であり、異様であり、なによりわからないことばかりであった。この、筆者にとって、様々な生態環境、様々な民族や習慣、文化が入り混じった混沌とした社会を、より知りたい、理解したい。それが研究を始めたきっかけである。

筆者がその中で選んだ研究テーマが、植民地期の集住政策下における先住民の経済活動である。植民地期における社会変化は、その後のペルー社会にも尾をひいており、現在のペルーの社会問題とも大きく結びついている。中でも16世紀中頃からペルー副

王領でスペイン人征服者によって活発に行われはじめた集住政策は、アンデス社会にとって後代にまで影響を与え続ける重要な植民地政策の一環であり、社会変化などを論ずる際に必ず言及されてきた。しかし集住政策そのものに関する研究は、近年、ようやく史料の発見などの成果から実態が明らかになりつつある状況である。

一方、植民地期社会の研究は、人類学、歴史学、民族学、考古学など多方面から追究されてきた。おおまかな流れとして、ヨーロッパ側、つまり支配者の視点で描かれた歴史を経た後、1970年代頃から1990年代にかけては、ワシュテルやラミーレスらの「敗者の視点」が注目されるようになる。現在ではこのような「支配者／被支配者」という植民地期における二極化された視点を乗り越えようとする研究が活発である。筆者の研究テーマでもこの「脱二極化」の視点は有効であると考えており、この観点からインカ期との比較を通して、集住政策が先住民に与えた社会的、経済的な影響について論じていきたいと考えている。

現在は、一般刊行されているものを中心に、データを収集している段階である。クロニカは従来の研究者の尽力により数多く出版されており、加えて近年では巡察記録などが一般刊行物として日々出版されてきている。これまで数多くの研究者がそうしたクロニカや巡察記録を基に研究を重ねてきたが、そうした既読されてきたデータを、最新の研究に照らし合わせ、独自の観点で読み解くことで、蓄積されてきた研究に一石を投じたい。また、インカ期を比較対象として取り上げることで、先スペイン期社会の研究を逆照射するようなものになれば、とも考えている。現在ではどの分野でも学際的な知見が活発であり、歴史資料から人類学的なアプローチを行うことは、筆者にとってそうした学際的な流れに乗る第一歩であるといえよう。

植民地期の集住政策はそれまでのアンデス伝統の変化をもたらした。実際、現在アンデス的な伝統と考えられているものは先スペイン期から継続するものではなく、植民地政策下で形成されていったとの見方もある。このような見地から、植民地期における社会変化を明らかにすることは、現代のペルー社会への理解にもつながる。本研究が、植民地期に留まらず現代社会における諸問題解決への一助となる

ことを願っている。

## ●古代メソアメリカの花に会いに行く

丹羽悦子（愛知県立大学大学院国際文化研究科  
博士前期課程2年）

メキシコの世界遺産テオティワ坎の壁画には、さまざまな図像が描かれている。ジャガーなどの動物が見られ、植物ではサボテンやトウモロコシも確認でき、花の咲く木も出現している。私の研究テーマは、壁画のなかでも花を中心とした植物の図像解釈だ。そのため、古代メソアメリカで咲いていた花について知りたいことは山ほどある。

花のなかには日本でも観察できるものがある。ナワトル語で「黒の花」、「20の花」、「盾の花」、「心臓の花」、「ジャガーの花」、「骨の花」と呼ばれる植物は、植物園の温室やホームセンターの園芸コーナーで出会える。「水一管の花」にいたっては、ある日隣の畑のおじさんが植えていたのでびっくりした。竹のようにぐいぐい伸びる茎は、中心が空洞になっていて送水管としてぴったりだった。ポ波尔・ヴフにもでてくるヒョウタンは名古屋で見た。人間の頭ほどある丸い実が幹から直接ごろんとぶら下がっているのに出くわした時、荒唐無稽に思われた神話への疑問が氷解したのを覚えている。

街をあるけばぎょっとすることもある。幻覚作用が認められ、古代メソアメリカで儀式や祭祀に使用されていた植物たちが、なんと街路樹の根元に、幼稚園の門の前に、公園の片隅に、なにくわぬ顔で生えていることがあるのだ。そんなときは、少しどきどきしながら観察させてもらっている。大学の薬学部や製薬会社の附属植物園に向くこともある。カカオの木に日本で会えたときは歓喜した。開花の様子を確認し、実のほうはちゃっかりお土産にいただいて、ツーショットで記念撮影もした。

しかし、日本で植物体をいくら観察しても、あくまで参考程度にしかならない。そこで大学院一年目に、メキシコシティにある国立自治大学（UNAM）の植物園を訪ねた。文献や図鑑ではおなじみになった植物を、今度は古代メソアメリカの人々の視点で観察しようと試みる。二年目には財団法人大幸財団の助成を受け、オアハカに向かった。ここは気候も温暖でマヤ地域の植物も見られることがある。

UNAM では温室育ちを強いられていた世界樹セイバも、オアハカでは枝を四方に伸ばすワニの姿で堂々と天空を支えてくれていた。



(写真1:「カカオの花」。チョコレートのカカオとは全く別の植物だが、カカオ飲料の香りづけに使用されている。著者撮影。)



(写真2:「ポプコーンの花」。サポテカ語では「天から降りてくる香りの花」という名前と呼ばれる。著者撮影。)

オアハカではどうしても見ておきたい花があった。「カカオの花」(写真1)と「ポプコーンの花」(写真2)である。この二つはアステカ時代に賢者が詩歌に詠み、エルナン・コルテスにも献上されたと記録のある貴重で香り高い花だ。木を所有している方のお宅を訪問して、ようやく念願の「カカオの花」の芳香を堪能できた。「ポプコーンの花」の木は街の中に生えていた。つぼみから開花までのステージを確認し、古文書に記載されていたとおりポプコーンははじけていく様子に似ていたことに感動した。

ところでこの原稿を書いている今も、自宅では甘い香りがほんのりと漂っている。乾燥させた「カカオの花」の香りだ。ダブルジッパーつきで密閉力抜群のはずのフリーザーバッグを二枚重ねてもなお、

もれてくるほど濃い香りだ。持ち帰ってまもなく一年になるというのに、匂いはますます濃く、甘くなっている。この現象は文献に記載があったので知ってはいたものの、これほどのものとは思わなかった。現地のの人にとっては当たり前のことだったかもしれない。しかし日本生まれの私にはこういった植物の特性をひとつひとつ知るところから研究が始まるのだと思う。そしてテオティワ坎の壁画に描かれた植物全体の意味が分かるようになりたい。だからこれからも、メソアメリカ生まれの花や木に会いに行こうと思っている。

### ●ペルー カハマルカ エル・パラシオ遺跡発掘調査体験

秦優莉香 (南山大学大学院人間文化研究科  
博士前期課程1年)

2012年6月14日～2012年9月8日、飛行機に乗ることも初めてだった私はペルーに渡航し、そのうち6月18日～9月3日に南山大学准教授渡部森哉先生の発掘調査に参加した。この調査はペルー北部高地カハマルカ県カハマルカ郡ロス・バーニョス・デル・インカ区ミラフロレス村のエル・パラシオ遺跡で行われた。エル・パラシオ遺跡は後700年以降に機能したワリの北限のセンターであると考えられており、エル・パラシオ遺跡の範囲や建築・出土遺物におけるワリとの関連性を見出すことが目的だった。



©Proyecto El Palacio

私は大学を選択する際、中南米の遺跡に関するテレビや書籍の影響で考古学に漠然とした興味を持っており、新大陸の考古学についても渡部先生から学



ぶことができるのではないかと考え、南山大学に進学を決めた。入学後も考古学に対する関心が高まり、大学院に進学して専門的な研究をしたいと考えていた。そして、今度ペルーで発掘をすると渡部先生から特別に声をかけていただいたことがきっかけで調査に参加することができた。最初のうちはペルーに行って発掘調査に参加したいという気持ちよりも経験や知識が不足している私が行っても大丈夫だろうかという不安の方が大きかった。しかし自分で行ってペルーがどんな国なのかを感じ、どんな遺跡なのかを知ることが大事だと言っていたことで決断することができた。発掘調査に参加するという貴重な機会を逃すことがなくて良かったと思っている。

エル・パラシオ遺跡では4つの発掘区(Sector B1、B2、C2、C3)が設定され、主にB1、C2、C3での調査に参加した。実際に現場で作業をすること自体が初めてで要領が悪く戸惑うことばかりであった。しかし発掘の最初から参加できたことで、何も無いように見える地面をなぜ発掘するのかを考えながら発掘するという体験ができた。

発掘の中では人骨が多数出土し、その中でも壁の下や土器の中に埋葬されたものは興味深いものだった。人骨を扱うことも初めてだったため、どのような向きで埋葬されているのか、一次埋葬か二次埋葬かを見極めることも難しかった。また、複数の水路が集中する場所、大量の石斧が出土する事実が見つかり、そのことがどのような社会形態を示すかを実際に目にしながら考えることの面白さ、難しさを感じることができた。

発掘調査では全てにおいて驚きの連続であったが、出土する土器の量が想像以上に多かったことが特に印象的だった。また Sector B1 の部屋状構造内を担当した際には象形黒色土器、象形赤色土器、大型土器、三脚付土器などほぼ完型に近い土器を発掘することができた。このことがきっかけとなり土器の持つ特徴や使用目的により興味を持つようになった。

今回の発掘調査ではスペイン語での意思疎通がほとんどできなかったこと、象形土器の一部を一度間違えて捨ててしまい、それをさがすのに手間取ったこと、発掘区に落ちたことなど個人的に困ったことだけでなく取り返しのつかない事態になりかねない失敗をしてしまった。しかし発掘調査以外でも、ワカロマ遺跡や発掘中のクントゥル・ワシ遺跡を実際

に訪れることができ知識とイメージを結びつけることができた。発掘調査が無い日にはバーニョス・デル・インカに行って温泉に入ったり一緒に調査を行ったペルー人の女の子と買い物に出かけたり充実した時間を過ごすことができた。本当にペルーに行くことができ良かったと感じている。



©Proyecto El Palacio

## ●チャルチュアパ遺跡発掘調査に参加して

深谷岬（名古屋大学文学部人文学科3年）

2013年2月中旬から4月上旬にかけて、メキシコおよびグアテマラの遺跡・博物館を見学し、エルサルバドルのチャルチュアパ遺跡発掘調査に参加した。中米を訪れるのは初めてだった。発掘調査に参加する前に遺跡・博物館を見学したのは、建造物の様式や規模などの特徴を自分の目で確認する必要があると思ったからだ。国立人類学博物館を皮切りに、テオティワカン、テンプロ・マヨール、チチェン・イツァ、ウシュマル、トゥルム、パレンケ、ティカルを見学した。各遺跡で注目したのは類似性と相違性である。同じ建造物ひとつをとっても、遺跡によって使用されている石の形状や大きさ、建築を修飾する彫刻の様式などが遺跡ごとに異なり、独自の特徴がある点が興味深かった。

遺跡を見学した後、エルサルバドルのチャルチュアパ遺跡に向かった。そして約一か月間、初めて踏んだエルサルバドルの地で考古学漬けの生活を送った。

チャルチュアパ遺跡は、1996年に京都外国語大学の調査団が、2000年以降は名古屋大学の調査団が入り、長期的に調査が行われている。重層的な建造物や都市の変遷を確認でき、先古典期から後古典期の

歴史を通時的に復元することができる点で、重要性が高い。今回の調査は、名古屋大学大学院文学研究科の伊藤伸幸先生の指揮のもと、エル・トラピチュエ地区で行われた。主な調査目的は、地下探査と発掘調査で得た結果との整合性の確認である。マウンド周辺の平地にトレンチを設定し、地下探査で確認された石彫らしき物体の有無の確認が課題とされた。日中は発掘調査に参加し、夜は宿舎で、これまでの調査で出土した土器の接合や、実測作業をおこなった。週末には、ホヤ・デ・セレン遺跡やサン・アンドレス遺跡、国立人類学博物館なども見学した。



©P.A.E.S

発掘調査が始まると、まず私は言語の壁にぶつかった。現地の作業員が話す内容が全く分からないのだ。帰国する頃には耳も慣れ、多少の会話はできるようになったが、タクシーの運転手に行先が伝わらず、治安の悪そうな場所で降ろされたこともあった。言語は道具に過ぎない。しかしその道具がかなり不足していた。また、考古学の基礎的な知識と技術の欠如にも気付いた。大学の講義と実習で、基本的なことは学んだ。しかし、作業に取り掛かると、思い通りにはならなかった。道具を上手く扱えず、手順も間違えた。無駄な時間もかかった。自分には知識も技術もないということを痛感した。

その一方、遺跡見学、発掘調査を通じてメソアメリカ考古学の魅力に改めて惹き付けられた。地域ごとに違う表情を見せるトラロック神や、精巧に積み重ねられた神殿ピラミッドの石段、初めて見る動物意匠が施された石彫に目を奪われた。また発掘現場では、作業員のおじさん達の笑顔に囲まれながら、大量に出土する土器片や黒曜石に心を躍らせた。

当面の私の目標は、考古学の基礎、スペイン語を学ぶことであるが、今回の経験は、視野を広げ、今後の方向性を絞るための良い機会になった。いくつかの遺跡を見学し、興味深いと感じた点もあったが、今後はやはり自ら調査に参加したチャルチュアパ遺跡の研究に携わりたい。具体的には、これまでの調査で出土した土器に興味がある。チャルチュアパ遺跡の土器編年が作成されてから、約40年が過ぎている。そこで、新たに得られた資料を用いて、土器編年を見直し、土器を通じた他地域との交流に関連した研究に取り組みたいと思っている。

小学生時代の、私の将来の夢は考古学者だった。今の私は、考古学専攻の大学3年生でしかない。それでも最近では、子供の頃に漠然と描いていた夢が、少しではあるが、現実に近づいた気がしている。

### ●金沢大学ティカル北のアクロポリスプロジェクト調査参加

福井理恵（金沢大学大学院人間社会環境研究科  
博士前期課程2年）

2012年、金沢大学のティカル北のアクロポリスプロジェクトがグアテマラ・ティカル遺跡において、本格的に始動した。私は金沢大学の「平成24年度フィールドマネージャー養成プログラム」及び、大学院博士課程教育リーディングプログラム「文化資源マネージャー養成プログラム」によって、二度にわたり現地調査に参加することができたので、その調査体験を御報告する。



（左が北のアクロポリス、正面が1号神殿）©福井理恵

1956年から始まったペンシルバニア大学博物館のティカルプロジェクトで製作された遺跡地図は、

現在も様々な場面で利用されている。しかし、実際に測量し直してみると、約 50 年前に作られた地図には大きな誤差が見られるため、2012 年度の北のアクロポリスプロジェクトでは詳細測量を行い、独自に新しく遺跡地図を作製するところから調査を始めている。

朝、ティカル国立公園の従業員用バスでティカルに着くと、まず「ティカル国立公園文化遺産保存研究センター(略称 CCIT)」でその日の準備を整える。このセンターは、日本政府の文化無償資金協力によって建設され、2012 年 7 月に完成したばかりの新しい施設である。日の丸を見つけた日本人観光客が見学していくのもしばしば見受けられる。金沢大学はグアテマラ文化スポーツ省よりセンター内に研究拠点として一室を貸与されている。また、それとは別に大学オフィスとして毎日 24 時間自由に使用できる建物も近くに貸与されている。この建物には、2013 年 2 月、新しい発電機が設置され、研究拠点としての整備が着々と進んでいる。

調査現場までは、機材を持って 20 分近くジャングルの中をひたすら歩く(稀に運が良い時は通りがかった国立公園の車に乗せてもらえる時もある)。観光用に切り開かれた道だが、北のアクロポリスは高台にあるため急な上り坂がずっと続き、ちょっとした登山道のようなものである。しかし、流石は世界自然遺産としても登録されているティカル国立公園。道中、様々な野生動物に遭遇することができる。

北のアクロポリスは、1号神殿、2号神殿、中央アクロポリスとともに、グラン・プラサを形成し、ティカルで最も有名な中枢区域に存在している。グラン・プラサに立ち、そびえ立つ神殿や建造物群の威容に囲まれた時の感動は筆舌に尽くしがたい。ひとたび測量を始めると、そちらに没頭して感動も忘れてしまいそうになるが、休憩時間の時にふと見ると、やはりマヤ文明の中心地とも言えるティカルにいるのだなと実感し、感慨深い。

トータルステーションを利用しての測量では、プリズムを建造物の各所に置いていく。実際に北のアクロポリスの建造物に登り、間近で観察すると、石灰岩が溶けてもろくなっていることなど、写真や遠巻きに見ているだけでは気付けないことを認識し、修復・保存の必要性を強く実感した。また、ティカルはマヤ地域で唯一、ユネスコ世界文化遺産かつ、

世界自然遺産でもある複合遺産として登録されている遺跡であるため、生い茂る木々に阻まれて、測量できなかった箇所も多い。他の遺跡では見られない、ティカル遺跡ならではの問題点である。これらは、実際にフィールドに出て活動してみなければ理解できなかったことであり、フィールド調査で得られるものの大きさを改めて思い知った。

考古学の技術やスペイン語など、まだまだ未熟なところばかりなので、今後とも積極的に調査に参加し、経験を積んでいきたいと考えている。

謝辞

金沢大学ティカル北のアクロポリスプロジェクトディレクターの中村誠一教授を始め、関係者の皆様に、この紙面をお借りして、心より厚く御礼申し上げます。

## ●ホンジュラス活動記

八木宏明(在ホンジュラス青年海外協力隊考古学隊員)

筆者は2012年6月から国際協力機構青年海外協力隊(以下、協力隊)の考古学隊員としてコパン遺跡で活動している。コパン遺跡はホンジュラス西部に位置するマヤ文明屈指の芸術性を誇る遺跡である(写真①)。



(写真① コパン遺跡 球戯場) ©八木宏明

残念なことに、2013年2月に外務省がホンジュラスの治安レベルの引き上げを行ったため、協力隊としてコパンで活動することができなくなり、2013年5月から隣国のエルサルバドルで活動することになった。この小稿では、コパンでの活動の締めくくりとしてこれまでの活動を通じて分かったことや感じ

たことを簡単にまとめ、活動報告としたい。

筆者のコパンにおける活動拠点はコパン遺跡付近に位置する研究センターである。この研究所は日本、アメリカ、ドイツなど様々な国の調査隊が使用しており、各国の最新の研究成果を聞くことができ、中米考古学者を目指す筆者にとっては非常に刺激的な場所である（写真②）。



（写真② ペンシルバニア大学による講義） ©八木宏明

筆者の活動内容はコパン遺跡出土遺物のデータベース化や博物館での展示作業や遺跡の踏査であった。ここでは前二者の内容について述べる。

コパン遺跡は 130 年近い調査の歴史があり、研究所内には多くの遺物が未整理のまま山積みになっている。そこで研究所では出土遺物のデータベースを作成し、遺物の整理を行っている。例えば筆者は北部住居群から出土した大量のカンデレーロ（蠟燭立てといわれている）や、大広場から出土した大量の黒曜石製石器の埋納品の整理を行った。遺物の整理やデータベース化を行うことで将来の研究者が研究しやすい環境を提供することができるため、とても重要な作業である。しかし、ホンジュラスは中米の中でも特に経済状況が悪く、当然文化面に投入される資金も少ない。そのため研究所に常勤する現地人は少なく、上記の作業を進めていくには明らかな人員不足である。さらに、ホンジュラスの大学には考古学科がないため若い人材がないという問題もある。このような問題は、協力隊員ではどうすることもできないが、将来的に良くなることを願うばかりである。

マヤ文明にとって非常に重要な日とされた 2012 年 12 月 21 日には、中米の各地でイベントが開催された。ホンジュラスにおいても当日は遺跡公園での

イベントが行われ、またこの日に合わせて首都やコパン村の博物館でマヤ文明に関する特別展示が行われた（写真③）。

展示内容は、コパン遺跡のアクロポリス内の墓から出土した副葬品が中心であった。「見せもの」的な展示内容であったことは否めないが、これをきっかけに多くの人々がマヤ文明に関心を持ってくれればありがたい。また、コパン遺跡への来場者数は 21 日に近づくにつれ増加したが、21 日をさかいに来場者数は一気に減少した。一時的なイベントだけでは遺跡を十分に活用できず、長期的な視野で遺跡を「文化資源」として活用していく必要性を痛感した。

協力隊には任国外旅行制度というものがあり、任国周辺の国に旅行することができる。筆者はこの制度を利用し、2013 年 3 月に隣国エルサルバドルを訪問した。



（写真③ 作業風景） ©八木宏明



（写真④ 製塩土器層） ©八木宏明

筆者は以前から沿岸部における人の活動、特に製塩活動に興味があり、この旅行中に先古典期に製塩活動が行われていたと思われるヌエバ・エスペランサ遺跡を訪問した。川の露頭では幅約 15 メートル、

高さ約2メートルの製塩土器の土器層を確認することができた(写真④)。



(写真⑤) 塩田 ©八木宏明

土器層の中には焼土片が確認でき、炉か何かの構造物の残骸だと思われる。市川彰氏(日本学術振興会特別研究員 PD・国立民族学博物館外来研究員)によって調査が行われているが、炉跡や作業面といっ

た日本の製塩遺跡でよく見られる遺構はまだ発見されていない。今後の調査に期待したい。

また、今回の調査では近年まで使われていた塩田を実見することができた(写真⑤)。

今回の調査の詳細は別の機会に紹介する予定だが、今後さらに調査を継続し、沿岸部における人と海との関わりについて通時的に復元していきたいと思っている。

今後は前述の理由からホンジュラスを離れエルサルバドルで活動を行う。エルサルバドルでは、国内唯一の世界遺産であるホヤ・デ・セレン遺跡の保存活動や近年発掘された土器のデータを基にこれまでのエルサルバドルの土器編年の見直しが業務内容である。さらに、筆者の関心がある製塩についても独自に調査していきたいと考えている。残された任期は1年程度であるが、今後の研究に繋がるよう、日々精進していきたい。

---

---

## 研究会情報

---

---

古代アメリカ学会は現在、東日本・西日本部会研究懇談会と年1回の研究大会を開催していますが、このほかに本学会員が主催、参加している研究会が各地にあり、年間を通して活発に活動しています。古代アメリカ研究の裾野がより広がり、益々発展していくことを願って、これらの研究会情報を掲載します。今年度7月以降の開催予定も掲載しておりますので、ぜひ足をお運びください(掲載は50音順)。

### ●アンデス・アマゾン学会(情報提供:大平秀一)

[anam.studies@gmail.com](mailto:anam.studies@gmail.com) (HPは現在作成中)

本会は、アンデス・アマゾンおよびその関連地域の自然・人文・社会についての学術研究および調査の推進をはかり、アンデス・アマゾン研究の発展に寄与することを目的としています。2009年ならびに2011年の研究集会を経て、2012年に発足いたしました。一年に一度、研究大会を実施しており、今後webjournalの発行を予定しています。

◇[参考]前年度開催実績

第1回アンデス・アマゾン学会研究大会

開催日 : 2012年7月7日~8日

開催場所 : 湘南 OVA

#### ■7月以降の開催予定

第2回アンデス・アマゾン学会研究大会

開催日 : 2013年7月13日~14日

開催場所 : 南山大学

### ●アンデス文明研究会(情報提供:桜井敏浩)

<http://www.h6.dion.ne.jp/~andes/>

古代アンデス文明ならびにメソアメリカ文明に興味を持つ一般の人々による研究会。毎月原則第3土曜日14~17時に、考古学者などの専門家を招いての定例講座および特別講座を開いている。定例講座は基本的には3~6月と10~12月はアンデス、1~3月はメソアメリカ文明を扱う。会報『チャスキ』を年2回発行している(市販もされている1,000円+税)。

アンデス文明研究会は、2014年に活動開始20周年を迎える。これを記念して、記念シンポジウム、会報『チャスキ』20周年記念特別号発行、アンデスもしくはメソアメリカ文明遺跡探訪旅行などの行事を企画中である。

場所 : 東京外国語大学本郷サテライト5階

会費 : 入会金1,000円、年会費4,000円

講座受講料(3カ月毎)5,000円

(特別講座は会員1,000円、非会員2,000円)

## ■7月以降の開催予定

2013年7月20日

特別講座：「ホモ・フロレシエンシス」

馬場悠男（国立科学博物館名誉研究員）

2013年8月3日

特別講座：「アンデス高地のクランデーロの現在－クスコのケロ村の人々」

岡本年正（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

2013年9月21日

特別講座：「アンデス高地牧畜民の食卓：日常と儀礼食」  
鳥塚あゆち（法政大学等非常勤講師）

2013年10月19日

「神殿と住居－カンパナユック・ルミ遺跡 2013年度調査速報」  
松本雄一（山形大学准教授）

2013年11月16日

「アンデスにおける生物考古学」  
長岡朋人（聖マリアンナ医科大学講師）

2013年12月21日

「パコパンパ遺跡の最新調査速報」  
関雄二（国立民族学博物館教授）

## ●アンデス 牧畜研究会（Andean Pastoralism Research Association: APRA）（情報提供：若林大我）

<http://apra505.blog62.fc2.com>

アンデス地域の牧畜をめぐる民族学・考古学に関心を持つ学生を中心とした、自由参加の研究会。月一回程度週末にセッションを開き、会員による調査速報、執筆中の論文の中間報告、論文や書籍の輪読などを行っている。会費は無料で、会場は東京大学駒場キャンパスがメイン。興味のある方は上記 URL の研究会ブログを参照するか、問い合わせ用のメールアドレス（XXXXXXXXXX）までご連絡下さい。

◇[参考]前年度開催実績（輪読回を除いた研究発表回のみ）

第66回（2012年5月26日）

「2011-2012年 先住民共同体チリユカ調査概報」  
若林大我（法政大学非常勤講師）

第68回（2012年7月22日）

「神殿と社会変容：形成期ワヤガ川上流域の社会過程から」  
井上恭平（埼玉大学）

第71回（2012年12月23日）

「二つのラム酒：ペルー・サトウキビ産業の勃興と

アンデス文化の受容に関する経済史研究」

大貫良史（法政大学・フェリス女学院大学非常勤講師）  
第72回（2013年1月19日）

「生産技術と品質：ペルー、カハマルカ県のチーズ販売戦略を事例として」

古川勇氣（東京大学）

第73回（2013年3月9日）

「アンデス形成期における社会複雑化の過程：ワヤガ川上流域の社会変化から」

井上恭平（埼玉大学）

## ■7月以降の開催予定

第76回（2013年7月6日）

文献講読の予定

## ●イベリア・ラテンアメリカ文化研究会（SECILA） （情報提供：井上幸孝）

<http://secila.secsaa.net/>

イベリア半島およびラテンアメリカを研究する歴史学・文化人類学・考古学・社会学等の研究交流、さらには東と西の研究者の接する機会を目的にして2001年に発足した研究会です。年数回の例会を関西（主に大阪）および関東（東京）で開催しています。2004年より津田塾大学の関連研究会として助成を受けながら、時には他の学会や研究会等とも合同で例会を開いています。関西地域世話人は、禪野美帆（関西学院大学）、小林貴徳（同志社大学非常勤）、関東地域世話人は、小原正（慶應義塾大学）、真嶋麻子（津田塾大学）、井上幸孝（専修大学）。開催案内メール配信をご希望の方は、古代アメリカ学会会員の井上幸孝までご一報ください。なお、例会参加の事前連絡は不要です。

◇[参考]前年度開催実績

第52回例会（2012年7月21日、大阪経済大学）

「先住民集落間における互酬性とコンフリクト－メキシコ、トラパネコ社会の宗教祭祀の変容をめぐる－」  
小林貴徳（同志社大学非常勤講師）

「共同体を超えた事実としての先住民自治－メキシコでの実践とその課題」

小林致広（京都大学）

第53回例会（2012年7月28日、専修大学神田キャンパス）

“Las elecciones de 2012 en Yucatán: algunas observaciones a nivel local y sus implicaciones a los niveles estatal y federal”  
渡辺暁（山梨大学）

“La vitalidad del maya yucateco”

Hilario Chi Canul (DCPH-Lengua y Educación,  
Universidad de Quintana Roo)

第 54 回例会 (2012 年 12 月 9 日、大阪経済大学)  
「民族衣裳の暗号を読み解くーマヤ文化圏の事例か  
らー」 桜井三枝子 (大阪経済大学)

“Cosmovisión y modernidad en la indumentaria y el  
tejido maya de Guatemala”

M.A. Barbara Jane Knoke de Arathoon (Universidad del  
Valle de Guatemala / Museo Ixchel del Traje Indígena)

第 55 回例会 (2013 年 1 月 12 日、専修大学神田キャンパス)  
「18 世紀メキシコにおける教会制度改革と地域秩  
序の変容ーイスミキルパン郡カルドナル教区にお  
ける祭礼費用の負担をめぐるー」

和田杏子 (青山学院大学大学院博士後期課程)

「マヤ首長論ー20 世紀初頭を中心にー」川上英 (東京大学)

第 56 回例会 (2013 年 4 月 27 日、専修大学神田キャンパス)  
「中央と周辺ーメキシコ中央高原における古典期の  
交易システムー」 嘉幡茂 (愛知県立大学)  
「ニカラグア考古学の現状ーニコヤ文化圏をめぐる  
諸問題ー」

長谷川悦夫 (埼玉大学教育機構非常勤講師)

司会・コメント: 青山和夫 (茨城大学)

\* 科研費「環太平洋の環境文明史」との合同研究会

#### ■7 月以降の開催予定

第 57 回例会 (2013 年 7 月 13 日、慶應義塾大学三田  
キャンパス)

榊玲子 (たばこと塩の博物館)、敦賀公子 (慶應義塾  
大非常勤講師) による発表の予定。

#### ●京都メソアメリカ考古学研究会

(情報提供: 村野正景)

この研究会は、メソアメリカやアンデスならびに  
中間領域などに関する考古学や人類学、博物館学に  
ついて、大学や博物館の研究者だけではなく、興味  
のある者や学生が気軽かつ自由に話をする場として  
2011 年に設けられた。学習を始めたばかりの者が学  
んだことを熱心にまとめてきたり、初めて参加した  
ラテンアメリカの調査を元気に報告したり、または  
博士論文の執筆者が練りに練った構想を発表したり、  
第一線の研究者が自身の研究の試論を提示したりと  
非常に幅広い内容だ。現在は 1 ヶ月に 1 回開催され、  
常時 10 名程度の出席となっている。今後は、定期刊

行物やテーマに基づく発表企画などを模索中。参加  
費無料、参加自由。会場は、フィールドミュージア  
ム研究所 (IFMA) 事務所 (京都市下京区西洞院高辻  
西入ル)。問い合わせは、事務局村野正景 (京都府京  
都文化博物館 [REDACTED]) まで。

◇[参考]前年度開催実績

第 8 回例会 (2012 年 4 月 21 日)

「2012 年春 タスマル遺跡調査報告」

植村まどか (京都外国語大学)

「ニカラグアの予備調査・報告」

南博史 (京都外国語大学)

第 9 回例会 (2012 年 5 月 27 日)

「遺跡のある町の住民が考古学 (者) に対して問う  
こと」

村野正景 (京都府京都文化博物館)

第 10 回例会 (2012 年 6 月 30 日)

「住居址建築からみるテオティワカン社会の変遷過程」

福原弘識 (国立民族学博物館)

第 11 回例会 (2012 年 7 月 15 日)

「メソアメリカ生物考古学の現在」

佐藤勇生 (京都大学)

第 12 回例会 (2012 年 9 月 23 日)

「パナマ考古学に関する予察」

西野浩二 (京都橘大学)

第 13 回例会 (2012 年 10 月 7 日)

「土から石へータスマル遺跡の建造物へ」

伊藤伸幸 (名古屋大学)

第 14 回例会 (2012 年 11 月 11 日)

「遺跡調査システム SITE シリーズの最新版について」

宮本美津夫 (テクノシステム株式会社)

第 15 回例会 (2012 年 12 月 2 日)

「メソアメリカにおけるニコヤ多彩色土器の研究」

新谷葉菜 (名古屋大学)

「メソアメリカ南太平洋側地域における後古典期前  
期文化の形成」

吉留正樹 (名古屋大学)

第 16 回例会 (2012 年 12 月 15 日)

「平城京の土器埋納の考察」

西野浩二 (京都橘大学)

「周辺地域のダイナミズム: トルーカ盆地とテオテ  
ィワカン」

嘉幡茂 (愛知県立大学)

第 17 回例会 (2012 年 1 月 20 日)

「2012 年夏ペルー人骨調査概報」

森田航 (京都大学)

「musculoskeletal markers を利用した分析の有用性」  
佐藤勇生（京都大学）

第 18 回例会（2012 年 2 月 23 日）

「メソアメリカ南太平洋側地域における後古典期前期文化の形成（修士論文）」

吉留正樹（名古屋大学）

第 19 回例会（2012 年 3 月 31 日）

「インカの謎がやってくる！インカ帝国展の楽しみ方」  
村野正景（京都府京都文化博物館）

## ●東北ラテンアメリカ考古学・人類学研究会

（情報提供：多々良穰）

<http://tl3a.wordpress.com/>

本研究会は、ラテンアメリカをフィールドとする考古学および文化人類学的研究に関して、意見や情報を交換し、お互いの研究を深めていくことを目的としている。1 年に数回、仙台（東北大学）と山形（山形大学）において、交互に研究会を実施している。

◇[参考]前年度開催実績

第 53 回（2012 年 5 月 27 日、東北大学）

「マヤ文化を演じるマヤの人たち～異文化消費・文化的実践・文化人類学をヒップホップする」

吉田栄人（東北大学大学院国際文化研究科）

第 54 回（2012 年 6 月 17 日、山形大学）

「ユカタン・マヤにおけるミルパの再考－焼畑農耕サイクルを手がかりに報告」

坂井妙子（東北大学大学院博士前期課程）

第 55 回（2013 年 1 月 12 日、山形大学）

「インカ帝国における食性の地域差－炭素・窒素同位体比を用いた研究報告」

瀧上舞（山形大学人文学部）

第 56 回（2013 年 2 月 9 日、東北大学）

「文化資源教育から見た世界遺産の国際協力」

多々良穰（東北学院榴ヶ岡高等学校・  
金沢大学大学院博士後期課程）

## ●メキシコ文化研究会（情報提供：福原弘識）

<http://culturamexicana.seesaa.net/>

メキシコ文化を研究するグループ。在墨邦人にメキシコ文化の魅力を伝えることを目的とし、2007 年より講演会を開催。メキシコ文化に関心のある人々にむけ、研究テーマについて分かりやすく説明する。

発表者は会の運営も行い、他の講演を聴講することで研究者間の交流を深める。在メキシコ日本国大使館別館 ESPACIO JAPÓN にて、聴講無料。2013 年は 9 月開始、詳細は WEB にて。

◇[参考]前年度開催実績

第 1 回（2012 年 1 月 24 日）

「メキシコ・シティ旧市街の広場と街路」

西村亮彦（メキシコ国立自治大学）

第 2 回（2012 年 1 月 31 日）

「ルイス・バラガンーグアダラハラの建築ー」

川上聡（LEGORRETA+LEGORRETA 設計事務所）

第 3 回（2012 年 2 月 7 日）

「メキシコ各地の気候風土とアシエンダ建築」

楠原生雄（環境大学）

第 4 回（2012 年 2 月 14 日）

「裁判史料からみる 18 世紀植民地社会ーセマナ・サントの祭礼費用をめぐるせめぎあいー」

和田杏子（青山学院大学）

第 5 回（2012 年 2 月 21 日）

「メシーカ人の一生ーゆりかごから墓場までー」

池田和歌子（メキシコ国立自治大学）

第 6 回（2012 年 2 月 28 日）

「オルメカ、テオティワカン、マヤの広がりーメソアメリカ文化圏の東端からー」

市川彰（名古屋大学）

第 7 回（2012 年 3 月 6 日）

「メキシコ文学の魅力ー女性作家が描いたメキシコ社会ー」

洲崎圭子（お茶の水女子大学）

第 8 回（2012 年 3 月 13 日）

「メキシコ人移民失踪事件ー9.11 以降の世界における移民問題ー」

平井伸治（メキシコ社会人類学高等研究所）

第 9 回（2012 年 3 月 20 日）

「ワステカ地域のカーニバル：イスカテペックの事例から」

吉田和隆（広島大学）

第 10 回（2012 年 3 月 27 日）

「過去の人権侵害と向き合う：民主化後のメキシコの挑戦と挫折」

馬場香織（東京大学）

第 11 回（2012 年 4 月 10 日）

「民族舞踊からみるオアハカ州」

村田佳子（メキシコ社会人類学高等研究所）

第 12 回（2012 年 4 月 17 日）

「メキシコ考古学の発見をたどる」新谷葉菜（名古屋大学）



第13回(2012年4月24日)

「メキシコの博物館 2 メキシコ国立美術館絵画鑑賞の手引きー20世紀絵画からメキシコの昔の風景をイメージするー」

渡辺裕木(メキシコ国立修復保存学博物館学大学、ADABI, A.C.)

第14回(2012年5月8日)

「ピラミッド建設後のお供えの様子ーラ・ホヤ遺跡の一括資料からー」

黒崎充(メキシコ国立自治大学)

### ●ラテンアメリカ探訪(旧メキシコ学勉強会)

(情報提供:土方美雄)

<http://www.ab.auone-net.jp/~tanpo/>

「ラテンアメリカ探訪」は、2004年2月に、「メキシコ学勉強会」としてスタート、月に一回、主に、東京・秋葉原の千代田区和泉橋区民館において開催し、メキシコ(その後、対象をラテンアメリカ全般に拡大)に関するジャンルを超えた、多彩な研究発表や報告&意見交換の場として、今年の5月で、通算109回を迎えます。自由な雰囲気の中、特に、若手の発表の場になっていくことが出来れば...と、考えています。

◇[参考]前年度開催実績

2012年4月14日

「Movimiento por la paz con justicia y dignidadの誕生から一年:国家非常事態にいかに対応するか」

スルタ・バルデリオス(メキシコに平和をグローバル・ネットワーク)

2012年5月28日

「カリフォルニアの壁画たち」

新津厚子(東京大学大学院)

2012年6月18日

「アンデスの精霊が舞う時:ペルー・ハサミ踊りの現在」

佐々木直美(法政大学)

2012年8月3日

「チアパスのマヤ遺跡&ピエドラス・ネグラス」

土方美雄(フリーランス・ライター、古代アメリカ学会会員)

2012年9月30日

「メキシカン・ガールズモード」

織家律子(カフェ・イ・アルテ)

富田信(ミュージック・キャンプ)他

2012年10月22日

「ブラジル柔道と日系人」

熊王乃恵美(東京大学大学院)

2012年11月5日

「プエルトリコの音楽の魅力と背景」

伊藤嘉喜(音楽ライター)

2012年12月8日

「ラテンアメリカのボクシング」

村野浩一(ボクシング研究家)

2013年1月28日

「オアハカの死者の日」

松川孝祐(人類学博士)

杉浦暖子(現代アーティスト)

2013年2月18日

「骸骨の聖母サンタ・ムエルテ図像の不思議」

加藤薫(神奈川大学教授)

2013年3月11日

「ルチャ・リブレのススメ」西村 FELIZ(人形作家)

### ■7月以降の開催予定

2013年7月(日付未定)

「ヨーロッパにおける『死の舞踏』の流行」

小池寿子(國學院大学教授)

## 事務局からのお知らせ

### 1. 第18回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第33号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第18回研究大会・総会を2013年12月7日に山形大学（山形県山形市）において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

なお、昨年第17回研究大会より、研究発表について審査制が導入されております。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による以下の「第18回研究大会における発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、すでに郵送したご案内の返信用ハガキにて、10月1日までに研究大会、総会、懇親会のご欠席についてご返信をお願いします。総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

記

古代アメリカ学会第18回研究大会・総会  
日時 2013年12月7日（土）  
研究大会 09:30～16:30（予定）  
総会 17:00～18:00（予定）  
懇親会 18:30～（予定）  
場所・会場 山形大学小白川キャンパス  
（山形県山形市小白川町1-4-12）  
理学部先端科学実験棟 S401 大講義室

### 2. 第18回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第18回研究大会実行委員長  
坂井正人

会員より申請があった研究発表については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許諾の可否について通知いたします。

研究発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDFファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、同時に返信用ハガキの「発表申請」に

おきまして「有」をマルで囲んでご返送下さい。

1. 発表申請者（会員に限ります）
2. 発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3. 発表タイトル
4. 研究発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
5. 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
6. 発表要旨（調査速報：800字程度、研究発表：1200字程度、ポスターセッション：800字程度。要旨とは別に1-2枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにしてください。また用紙設定はA4にて、1ページ40字×40行、横書き、余白は上35mm、下・左・右30mmとしてください。）

（\*発表時間は、調査速報20分、研究発表30分を予定しています。ポスターセッションはA0で2枚以内によるものとします）

\*締切：10月1日（火） 午前10時（メール必着）

審査結果については、10月15日（火）頃に、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

#### \*参考

「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成23年12月2日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

<内容>

- (1) 研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的  
研究状況において一定の水準に達していなければ  
ならない。
- (2) 発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに  
関する権利を侵害してはならない。

<形式>

- (1) (口頭発表をおこなうことができる者)  
口頭発表者(実際に口頭で発表をおこなう者)は  
会員でなければならない。ただし実行委員会が企画  
した招待講演・発表等についてはこの限りではない。  
また、口頭発表者は、会員であれば第2発表者以  
下でも差し支えない。
- (2) (発表者および共同発表者の記載順)  
発表者名(単独発表か共同発表か、共同発表の場  
合発表者記載順など)は、データに関する権利等の  
観点から適切でなければならない。このため、口頭  
発表者が会員であれば、非会員は第2発表者以下の  
共同発表者となることができる。
- (3) (複数の口頭発表についての制限)  
1回の研究大会において会員が口頭発表をおこな  
う機会は一人1回とする。ただし、複数の共同発表  
者(記載順を問わない)となることができる。

以上

### 3. 原稿募集

#### ①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第16号(2013年  
12月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。  
投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定・執  
筆細目(第15号掲載の最新のものをよくお読み  
の上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投  
稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフィー  
ルドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラ  
ボラトリーでの分析結果報告など会員諸氏からの投  
稿をお待ちしております。「論文」は査読を終えたも  
のから随時掲載が決まります。「調査研究速報」の原  
稿締切は9月25日で、査読結果により掲載が決ま  
ります。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛て  
に事前にご連絡願います。投稿カードを配布します  
ので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先:

井上幸孝(運営委員、会誌編集担当)  
〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1  
専修大学文学部

Tel. Fax

E-mail

#### ②会報「35号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、  
多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考  
えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集し  
ますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的  
にご投稿くださいますようお願いいたします。

##### ◎内容

###### ○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会  
の会報記事としてふさわしいテーマ。

###### ○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会  
誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の  
情報も可。

###### ○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

###### ○その他

会員にとって有益な学術情報。

##### ◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字(会報2  
ページ分)以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その  
他のファイルについては、会報担当委員まで事前  
にご相談ください。

##### ◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容につ  
いての問い合わせや修正等のご相談をする場合があ  
ります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号で  
は掲載されないこともあります。掲載の可否につ  
いては、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿  
も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス 

（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 12月5日（木）

○発行予定 1月上旬

#### 4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙、または以下の口座にお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2010年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812  
加入者名：古代アメリカ学会  
三菱東京UFJ銀行本厚木支店  
口座番号：1761650(普)  
口座名義：古代アメリカ学会

#### 5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

#### （事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いいたします。

---

#### <編集後記>


今号は多くの会員による寄稿・投稿で完成しました。協力いただいた皆様に、この場を借りて感謝いたします。

本学会協力事業の公開フォーラム「古代文明の生成過程—マヤとアンデスの比較—」は松本雄一会員、国際シンポジウム「中期ホライズンにおける多様性と共通性」は土井正樹会員に、当日行われた熱い議論の様子を分かりやすく報告いただきました。

「会員からの寄稿」では「フィールド調査体験記」として特集を組み、12名の会員から寄稿いただきました。現地調査での体験談を、自らの問題意識や調査の目的、研究の展望に交えて瑞々しく綴っていただきました。

また、「研究会情報」には8つの研究会・学会から情報をいただきました。これら各地の研究会や本学会の東・西日本部会による研究懇談会が、本学会員の研究をより深め、やがて古代アメリカ学会に還元されることを期待したいと思います。

（福原）

発行	古代アメリカ学会
発行日	2013年6月29日
編集	古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識 中川 渚
古代アメリカ学会事務局 〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学教養学部 	
E-mail	jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座	00180-1-358812
ホームページ URL	http://jssaa.rwx.jp/